



胸焼け



川崎ゆきお

老人が食堂街の通路に立っている。大都会のこの場所に来るのは久しぶりのようだ。その近くにトイレがあり、よく人が立っている。空きを待っているのではなく、連れを待っているのだろう。この場合、意味合いが分かるので、不審ではない。

その老人が立っている場所は狭苦しい通路で、すれ違うとき、肩を横にしないといけないほど。だから、邪魔なのだ。

「どうかしましたか」

いかにも温和そうな青年が聞く。本当に心配してのことか、邪魔なのでどちらかに寄ってくれと言っているのかは曖昧だが。おそらく両方だろう。

「あつたんだがねえ」

「切符ですか」

「いや、食堂だ。何とかグリルと言っていた。若い頃通った店だ」

「この辺りですか」

「ああ、そうだ」

「そこに洋食屋があるでしょ。あれじゃないのですか」

洋食グルメグリルと看板が出ている。

「場所はそうなんだが」

「だったら、改装したんじゃないのですか」

「メニューを見たが、上等になっている。昔はカウンターだけの小さな定食屋だったんだ」

青年も中を覗き込む。

「ああ、ここはたまに僕も入りますよ。高いですよ。それで、昼時など、仕方なしに入ります。この店高いわりにはあれですから、すいてることが多いんです」

別の通行人が来たので、二人は脇に寄る。

「入られたらどうですか。この店でしょ。僕も入りますから」

「じゃ、あなたは、この店に」

「はい、昼ご飯、まだなので」

二人は洋食グルメグリルに入った。

店は一人で全てやっていた。

「昔は調理場にもう一人いたんだけどねえ」

「そうなんですか」

注文をしたあとなので、店員は奥で調理している。

「キャベツが白くてねえ。芯ばかり。細かく切ればいいものを、粗いので、歯が痛かったよ。あの芯ばかりのキャベツが食べたくてねえ」

「そうなんですか」

「それとねえ、硬くて筋のあるトンカツ。ガムのようなものでね。噛んでも噛んでも千切れない。なかなか飲み込めないんだが、急いでいるので、飲み込んだよ。そのためか、胸焼けしてねえ。二時間ほどは仕事も出来なかったよ。さらにねえ、油が安物で、さらに古いのを使っているんだろうねえ。しかし、安くてねえ。量も多いし。だから、よく来たものですよ」

店員が定食の皿を運んできた。グルメランチだ。

老人はキャベツを見た。量が多く、細かく刻まれている。青い箇所も少しは見える。

客がもう一組入って来て、注文する。それで、店員はまた奥へ行く。

「この衣、柔らかそうだねえ。昔はねえ。ブツブツのパン粉だったのか、硬い塊があってねえ。それが歯の間の変なところに挟まってねえ。歯茎から血が出たこともある」

「そうなんですか」

「悪口を言ってるわけじゃないですよ。まさかあなた、この人じゃないでしょうねえ」

「違います。この近くで働いている者です」

「そうですか、でも、その悪口の内容なのですが、いずれも懐かしく思えるのです。あのサービスランチと、やはりこのグルメランチは違う」

老人はトンカツを箸で挟み、口の中でもぐもぐいわせている。

「柔らかい。上等だよ。でも違うんだ。あの筋のある硬い肉じゃない。やはり違う店になっていたんだなあ」

「そうなんですか」

「これじゃ、胸焼けしないよ」

「その方が、いいんじゃないのですか」

「いや、あの胸焼けが懐かしい」

店員は、その会話が少しだけ耳に入ったようだ。

「親父の時代ですね。その感じ」店員が解説を加える。

「ああ、あなた、息子さんですか」

「いるんですよ。お客さんのような常連さんが。あの頃のほうがよかったって、あれは駄目でしょ。親父がケチな上、腕も悪い。だから値段だけは安かった。それだけですよ」

「今は、上等ですよ」と、老人。

「しかし、客は親父時代の方が多かった。不思議です」

「だがねえ、来たくて来ていたわけじゃない。他に行く店が思い付かないとき、何となく来ていたんだよ。適当に腹を膨らませよう程度でね」

「それが良かったんでしょねえ」と、二代目の息子。

老人はそういう会話が成立しただけでも満足だった。

そして、食後、青年と別れ、通路を歩いた。以前なら、このタイミングで来るはずなのに、来ない。胸焼けだ。

「さらにこの辺りで眠気が来るはずなんだが」と老人は重ねて呟いた。

了